

*目次

はじめに 3

今西進化論をめぐるひとつの謎 3

権威に“翻弄”される認知 11

孤立妄想と共同妄想 16

本書の目的と構想 20

謝辞 22

第1部 今西錦司の種社会進化論

第1章 今西錦司の種社会進化論 1. 前期 35

今西錦司の生涯 35

種社会進化論の展開 38

その前史——『生物の世界』での主張 39

遺書からの出発 39

今西生物社会学の根本概念 40

後年の理論の原型 43

自然選択という現象に対する姿勢 46

自己完結性という概念 47

独自の進化論の提唱 48

その位置づけ 48

今西の最初の種社会進化論 51

連続的に発生する、方向性をもった突然変異 53

個体ではなく種が、変わるべき時にいっせいに変わる 55

進化に導く突然変異は、生物の側からの働きかけで起こる 56

目的論的解釈の必要性 58

主流進化学説との対決 63

ダーウィンの主張との対比 63

個体レベルと種レベル 68

メンデル遺伝学とダーウィンの進化論の関係 70

ラマルクの再評価と哲学的考察 74

自前の理論の展開 78

退化という問題 78

進化は棲み分けの密度化 80

種の分離が先で、適応が後か 82

変わるべくして変わる 83

上位からの規制という概念の萌芽 85

人類の進化——ネオテニーに基づく進化 87

第2章 今西錦司の種社会進化論 2. 中期 91

既成の概念との決別と新たな展開	91
「私の進化論」	91
突然変異概念との決別	92
個体変異の連続こそが進化である	99
ゆっくりした進化と急激な進化——小進化と大進化	104
人間の脳化——適応概念の放棄へ	106
“見えざる手”の働きと自己完結性	107
棲みわけの成立機序と種の分化	109
ダーウィンとの再対面	110
上位からの規制——再説	107
個体変異に基づく漸進的進化——再説	112
自己発展としての進化	114
余剰エネルギーの使い道	115
目標指向性という問題	117
自らを美術作品として完成させる目的	117
いかにして完成させるのか	107
ダーウィンとの対決	119
『ダーウィン論』	120
ダーウィニアン・ドクトリン	121
ファルコナーによる区切り平衡説の萌芽	123
ドクトリンと事実のはざま	127
変種の位置づけという問題——大進化に対する小進化	131
ラマルクの進化論	142
環境のとりあげかた	144
大進化という大問題——再検討	147
適応という問題	152
定向進化という用語について	153
ダーウィンとウォーレス	154

第3章 今西錦司の種社会進化論 3. 後期 159

ダーウィンの壁を超えた後の自由な展開	159
今西の真意はいずこに	159
自然観察者の消滅と実験室的実験の偏重	162
ラマルクの進化論の再検討 1. 獲得形質の遺伝	163

ラマルクの進化論の再検討	2. 用不用説	164
適応の説明としての進化論		168
今西の同土としての昆虫学者		173
今西の公明正大性		178
種の起原		179
相互に隔絶された存在としての種		183
棲みわけの意味するもの		186
遷移学説と棲みわけ概念		187
個体起源と種起源		193
定向進化		195
浅間一男の進化論		199
人類の進化に見られる定向進化的側面		200
頭蓋容量の増大と言語革命		201
プロトアイデンティティ		206
プロトアイデンティティ理論		208
集団帰属性		210
大いなるものへの帰属		214
プロトアイデンティティ概念の理論的統一		215
プロトアイデンティティ概念の検討		218
プロトアイデンティティとは何か		218
集団帰属性概念の検討		222
自然学の展開		227
創世の神話		227
大いなる類推		228
第4章 今西錦司の種社会進化論	4. その批判の実態	231
今西と一般の科学者の生きかたの違い		231
種社会進化論に対する生物学者の態度		232
自然選択説という偶然論		239
現行の科学知識に基づく否定		242
今西進化論批判の実例の検討		246
1. 河田雅圭		246
2. 岸由二		257
岸由二による今西進化論批判の検討		261
3. ベヴァリー・ホールステッド		268
ホールステッドによる今西進化論批判の検討		275
真理の核心と抵抗の関係		278

付録——批判の際の政治的思想の混入 282

第2部 小田柿生物社会学と進化論

第5章	小田柿進二の生物社会学	289
	小田柿進二の観察眼	289
	日常生活の中での観察	289
	小田柿進二の経歴	292
	小田柿が観察した生物社会の種々層	298
	目に見えない境界線	298
	目に見えない障壁	300
	自然破壊が作り出した“中間地帯”という定着地	303
	小田柿生物学の概念	305
	複合社会という概念	305
	離脱と転入	309
	生物社会による規制の枠	312
	過剰個体の処理	314
	無規制状態	315
	種の決定による方針	317
	小田柿生物学の展開	320
	外来種の地位	320
	種と品種のふるまいの違い	326
	生物社会学から見た種と品種	329
	種個有とされる習性と複合社会による規制	331
	ある範囲で同時に起こる現象	334
	全体として小型化した植物群	336
	自然選択説に対する疑問	342
第6章	種個体同士のつながりと上位社会による規制	345
	侵入種の勢力の消長	345
	身のまわりで起こるふしぎな現象	345
	小笠原群島で起こった現象	347
	上位社会による規制という概念に関する検討	353
	生態的抵抗	355
	エルトン以後の展開	359

侵入される側による調整	360
宮脇昭の“生物社会の掟”	363
帰属社会からの隔絶の意味	370
帰属社会の規制を免れるには	370
自らが帰属社会から隔絶されていることを知る	375
機械論と生氣論の間隙への探究	378
構造主義生物学という探究	380
構造主義生物学の出発点	380
柴谷の努力	384
その後の展開	386
構造主義生物学の根本的問題	389
事実と理論の乖離	395
小田柿による複合社会概念の再検討	399
規制を免れたかに見える動植物	399
規制を免れたかに見える理由の検討	403
生物社会学から見た“競争”	407
植物複合社会の脆弱性をついた侵入	409
籍の有無という問題	412
籍を管理する側に生じた異変	416
明治神宮の森と生物社会学	419
明治神宮の森の生物社会学的位置づけ	419
生物社会学の今後の課題	425

第3部 人類の特殊性

第7章 人間の行動に見られる人間的特性 433

幸福否定と抵抗の種々相	433
幸福感の客観性と相対性	433
人間の心の3層構造	436
従来とは正反対の着想	436
内心と幸福否定	437
心理的原因が共通してもつ特徴	439
感情の演技というシミュレーション	443
感情の演技の方法	443
心理的原因と感情の演技の関係	445
抵抗と反応の本質	447
前向きな行動に対する抵抗と反応	447

反応や症状のもつ強い力	450	
「本当にしたいこと」に対する強度の抵抗		451
正当な主張の難しさ	451	
自発性に対する強い抵抗	452	
人間の独自性	453	
人間の動物的側面と幸福否定	455	
なぜ実母が子どもを虐待するのか	456	
愛情否定を強く伴う養育	460	
理不尽な仕打ちに立ち向かう意味	462	
人間性の本質	465	
楽しさとうれしさ	465	
試練と抵抗	466	
創造活動と抵抗	469	
自分の意識に見せるための演技	470	
異質な原因による反応や症状	471	
第8章 探検的行動がもつ意味	475	
探検的行動とは何か	475	
遊び——探検的行動の起源	475	
探検的行動の意味	477	
純粋探検行動が評価される理由	478	
新しい発見や着想に対する抵抗	480	
内的純粋探検行動の意味	484	
真理の力	487	
「本当のことを知りたい」という強い意志およびその効果	487	
未知の真理を知ろうとする行為がもつ力	491	
影響力はどこまで及ぶか	494	
人間の心の進化	494	
肯定的で内発的な変化	509	
内発的な変化の由来を探究する	513	
抵抗を乗り越えようとする努力と人間の進化——再考	517	
第9章 ヒトの人間的特殊性	523	
上位社会からの規制——再検討	523	
つながりと規制の実在を探るためのもうひとつの手がかり	523	
上位の実在への従属と自粛	525	

同調行動と自粛	526	
見えないカーテンの中に入る	529	
外来動植物の位置づけ	530	
人間複合社会説の妥当性の検討		532
ふたつの複合社会	532	
人間複合社会の特殊性	534	
人間複合社会の位置づけ	534	
異種の領分	536	
人間複合社会説の疑問点	539	
スズメ属の系譜	540	
人間の特殊性	543	
超常的現象と生物学		544
心の力と生物学者	544	
人間の心が動植物に及ぼす影響	547	
注目すべき生体 P K 実験	550	
ベングストーンが行なった一連の実験	550	
ベングストンの唱えるつながり	553	
動物からヒトへ		557
人間のつながり	557	
幸福否定の生物学的起源	563	
今西および小田柿の立場から	565	
ベルクソンの立場から	567	
ベルクソンの創造的進化論	574	
幸福否定理論と進化論	577	
人間が意識の上に昇らせるのを嫌う事象	579	
今西とベルクソンの立場から見た個人の幸福否定現象		581
幸福否定現象から導き出された仮説の検討		583
意識とは何か	586	
系統発生的に見た心理的意識	586	
不明瞭化現象の裏にあるもの	589	
人間化の意味	592	
参考文献		595
索引		641

図表目次

第1章	
図1-1	カリフォルニア州の農場で働いていた頃の湯浅八郎 37
第2章	
図2-1	キイロショウジョウバエの突然変異個体 99
図2-2	フランス南部のショヴェ洞窟の壁画 119
第3章	
図3-1	ウィリアム・トンブソンの肖像および Everyman's Library 表紙 177
表3-1	プロトアイデンティティと近縁概念 223
表3-2	異種間養育されたセグロカモメとニシセグロカモメ 225
第4章	
表4-1	今西進化論と定説との関係についての研究者による把握 237
第5章	
図5-1	小田柿進二のノート 293
図5-2	京都帝国大学農学部昆虫学研究室 294
図5-3	長崎時代の小田柿のノート 295
図5-4	長崎時代の小田柿進二 295
図5-5	晩年の小田柿進二 297
表5-1	生物複合社会の構造 306
表5-2	外来生物の定着の類型 322
表5-3	植物相の段階 326
第6章	
図6-1	棲息環境別の生体の平均値の調査年度による変化 348
表6-1	小笠原の陸産貝類固有種とその絶滅率 349
図6-2	造成時の明治神宮の森 368
第7章	
図7-1	幸福否定理論で考える心の3層構造 436
表7-1	年度別に見た最近の虐待者 458
表7-2	アメリカの虐待者の比率(2005-2006年) 459
第8章	
表8-1	超常現象の存在に対する科学者の態度とことの重大性の認識の関係 485
表8-2	主な計算神童 516
第9章	
図9-1	ヒトの独立と発展の模式図 535
表9-1	ベングストンらの実験での治療成績のまとめ 553
表9-2	第3実験での被験者の専攻別に見た治療成績のまとめ 555
表9-3	印象型テレパシーにおける発信者と受信者の関係 563
表9-4	意識と無意識の階層別分類 587
表9-5	さまざまなレベルの不明瞭化現象 592